

社会体育指導者の課題

日 高 哲 朗

千葉大学教養部

The roles of the recreation leader

Tetsuroh HIDAHA

The College of Arts and Sciences, Chiba University

はじめに

日本におけるスポーツはもともと学校教育の中の正課の体育の授業としてまた課外活動の一環として発展してきたために、もっぱら若者のものであったし、またダイナミックな筋肉活動を伴うことから男性の活動として位置付けられてきた。しかし今や日本におけるスポーツは軽スポーツを含めると400種以上になると言われ、女性に限らず年齢を問わず、様々なやり方で親しまれるようになってきている。スポーツを若者中心のダイナミックな筋力を必要とする活動だけに限定するような考え方はもちろんもはや現代には当てはまらない。

これまでスポーツの指導者といえば、学校の体育教師を指していたし、あるいはせいぜい学生の課外のスポーツ活動を指導するコーチの肩書を持つ人や一般企業の代表チームを指導する人など、高度化スポーツの関係者でそのほとんどが占められていた。なぜならスポーツを恒常的に行う人々がそのような人々に限られていたからである。そこではコートの上で如何に最高の技術を発揮するかが目的となっているので、指導者の関心はおおむね技術・戦術に向けられる。しかも自分の持つスポーツに関する知識を一方的に与えるのがほとんどと言ってよい。

しかし、スポーツ愛好者が増えるにしたがって、スポーツ愛好者の性、年齢、職業などの社会的な背景は多様化し、必ずしもスポーツの技術向上だけを願ってスポーツを行う人ばかりではなくなってきた。[なぜスポーツを行うのか]と聞いてみるとよい。様々な答えが返ってくるはずである。こうした現状ではコートの上で競技力向上だけを目的として指導してはもはやそうしたスポーツ愛好者の欲求を満足できなくなってきた。スポーツ愛好者は、ますます増大することを考えると、そのような“ニーズとしてのスポーツ”に敏感に反応し、多様な要求に応えられる指導者が必要とされる。つまりこれからの社会体育指導者は、自分の持つスポーツに関する知識を一方的に対象者に与えるのではなく、人々のスポーツに対する様々な異なる要求をまず把握し、そしてそれからそれに柔軟に対応して行ける巾広い能力を身につけていることが求められる。「指導者」と呼ばれてはいるが、社会体育指導者には実際に指導以上にその他の側面にも注意を払わなければならない。指導者不足が叫ばれ、指導者の育成が急務であると提言されながら、実際にはそうした要求に応えられる指導者の育成はまだ緒についたばかりである。本論はこの指導者育成に当たっ

てどの様な資質を身につける必要があるのかを考える手がかりを得ようとするものである。

そこでまず人々の要求に柔軟に対応できる指導者という観点から、人々のスポーツに対する要求はいったい何かを明らかにしようと思う。そしてそこから、求められる社会体育指導者像を描き、さらに指導者育成に当たって用意すべきカリキュラムにも言及しようと思う。

さて、人々の要求を認識しようとする場合、直接社会調査の結果から推察する方法もあるが、ここでは人々の社会背景から理念的に推察してみようと思う。スポーツが多くの人々に行き渡るには、人々の余暇時間の増大が必要であることは言うまでもないが、それはスポーツが余暇活動の一つとして位置付けられていることを前提にしている。ニーズとしてのスポーツを余暇活動の一つとして位置付けると、人々の生活の中で余暇はどのような価値をもっているかにより、それに応じてスポーツに対する要求も異なってくるはずであると考えることができる。すなわちスポーツに対する要求は、人々の生活の中に余暇がどう位置付けられるかによって抽出できると考えるのである。

1. 余暇について

近代に特徴的な余暇時間とは、それが予測可能な時間として立ち現れてくるところにその特徴がある。農業社会に見られるように自然の力（例えば突然の大雨）によって余暇時間が強制的に作られるわけではない。一日の労働時間、週の労働日、あるいは年間の総労働時間などが予め決められており、たとえ残業などがあるとしても、仕事から解放される時間は、農業社会に比べるとはるかに予測可能であり、計画可能である。そこから余暇をどのように使うかは本人次第であり、余暇には本人の意図が反映されることになる。ましてや労働時間が短縮される傾向にあり、また豊かな社会と言われるように、日常生活をしていく上で必要な財貨を使ってなお余る余剰の財貨が手元

にある現在では、よりいっそう余暇に主体的に計画的に関わることが出来る。

余暇とは何かということについて、これまでの余暇（レジャー）概念を鳥敢しながら検討すると、余暇は「非仕事時間から社会的・生理的必需時間を除去した自由時間に、自立的に決定し、自由裁量に基づいて行う活動の中で、純快楽を意図・指向した活動である」¹⁾と定義できると結論づけられるようである。本論はもともと余暇概念について論じるものではなく、社会体育指導者の今後の指導を考えていくときの指針を理念的に呈示することにあるので、さらに深い論議は次の機会に譲るとして、ここでは余暇が時間、活動内容、活動の価値的側面の3つの側面から定義されることに注目したい。余暇は、仕事から解放される自由時間という側面が強調されているが、そこからこれまで「仕事か？ 余暇か？」という二分法で生活時間が区別され、どちらを重視するかといった設問が一般的にとられてきた。しかし、実はこの余暇の中には家庭生活という領域ももともと含まれていた。ただ仕事の領域が生きていく上で重要な部分として捉えられてきた歴史があるために、仕事以外の領域を一括して余暇にまとめてきたに過ぎない。余暇の意味も人々の生活を構成する他の二つの領域、即ち、仕事と家庭との関係から捉えることによって、より深く理解できそうである。

人々の余暇を、仕事と家庭というこの二つの生活領域との関係から捉えようとする場合、ライフステージもしくはライフコースを考慮する必要がある。人は一生のそれぞれの段階において他の段階とは異なる特有の生活パターンを示す。例えば、親元にあって過ごす学生時代、社会人となった独身時代、結婚して子供を教育する時代、退職してからの余生の時代では、そのときどきにあって三つの生活領域のつながりは異なり、生活パターンは異なる。スポーツを捉えるとき生理学的な見地からも加齢の問題は切り離せないが、それ以上に人々の生活様式が年齢によって性によってまちな

ちであり、そこから余暇の意味もそれぞれに特徴的である。次節では、簡単にライフステージ別に見た余暇を素描し、理念的ではあるが導き出されるスポーツに対する要求について述べてみようと思う。

2. ライフステージ別にみた余暇の特徴

本小論ではライフステージを就業の観点から、就職するまでの子ども（～18才）、就職し働く社会人（～65才）、退職した高齢夫婦（65才～）の3つに大別し、社会人をさらに結婚の有無という観点から、独身と子を扶養する親に分け、そして子を扶養する親をさらに主婦を区別して考えようと思う²⁾。

(1) 子ども（～18才）

子どもの生活の中心は、教育を受けることであり、家庭の中で、そして特に学校という特別な教育機関のなかで教育を受け、様々な事を経験し、様々な能力を身に付けることが中心となる。現代社会においてはむしろ本人の持つ属性よりも業績が重視されており、家柄や縁故といった生まれよりも、何が実際に出来るかという本人の能力が重視されている。つまり何を身につけており、何が出来るかという所謂本人の実力が求められている。しかし、それを測る明確な指標があるわけではなく、せいぜい権威のある機関が認める資格などがその一つに上げられるに過ぎない。受けてきた教育が直接職業につながるものと考えられ、学歴が過度に強調されるようになった結果、教育には大きな力が注がれるようになったと言えよう。それも受験を想定した教育であり、そこから入試の激化が受験産業を増大させ、多くの子供たちがこの受験産業に巻き込まれているのが実情である。

そえゆえこの時期の子供たちの余暇は、「教育」に浸食され、受験戦争に蝕まれていると言っても過言ではない。学校を終えた放課後や週末の休みでさえ塾通いで、家庭でも宿題に追われるという生活を送っている。また受験戦争に巻き込まれな

い時間でも、おけいごとなど所謂有益な活動で占められている。

また余暇活動にスポーツを取り入れていたとしても学校の課外活動の中で行われる結果、そこにもなにがしかの成果（業績）を上げることが目的とされ、一方では勝利至上主義に走る厳しい練習にどっぷりと浸るか、教育的配慮という観点から協調性とか忍耐力といった性格陶冶の性格を帯びてしまう。

学校から離れてスポーツを楽しもうとすると、小学生レベルではスポーツ少年団が公的な集団として存在しており、そのなかでスポーツを楽しむことはできるが、多くはスポーツを行う機会に恵まれていない。中学生、高校生にいたってはそうした組織はまず用意されていない。

しかし学校の5日制に関する「中間まとめ」が文部省から公表され、学校の週休二日制はだいぶ現実味を帯びてきており、「ゆとり」ある生活が唱道されるなか、今後その新しく生じる余暇がどのように使われるのか興味深い。

(2) 社会人（～60歳もしくは65歳）

一生の内でのこの時期こそ仕事に打ち込む時期である。ただ仕事に拘束される時間は通勤に要する時間も含めて考えなければならないが、これを考慮すると都市部に通勤する人々の勤務間隔時間³⁾は圧迫され、毎日の余暇時間は少なくなる。この余暇時間を充実させようとするとう帰宅してから就床の時間が4時間ほどないとまとまった余暇を創り出せないと言う⁴⁾。これが不可能であるとすれば、週末にまとまった余暇時間を作るか、連続休暇を作り出さないかぎり、余暇生活の充実は期待できない⁵⁾。国家公務員の週休二日制が92年の夏にも実施されることが閣議決定されたが⁶⁾、これにより大企業はもとより民間の中小企業の週休二日制の実施にもますます拍車がかかることが予想され、余暇時間は拡大する。週休二日制の導入により週末の使い方も変わり、スポーツを含むより積極的な余暇活動が行われると予想できる。

a. 独身（～25歳もしくは28歳）⁷⁾

家庭に対する責任もなく、仕事にしても時間に追われることはあっても、まだまだ大きな責任を負うことはない。時間的にも金銭的にもあまり苦労を感じない時代だと言える。（ここでは就職しているわけではないが大学生も含めて独身に加えて考えよう。）

自由時間をどのように使うかその使用目的の質問に対して、20代は「レジャーなどの自由時間そのものを楽しむ」⁸⁾ことを上げている。20代という年齢が必ずしも独身を意味はしないが、傾向としては理解できるだろう。またレジャー活動の数を聞いても、その数は多く、様々なレジャー活動に携わっていることが理解できる⁹⁾。余暇を自分の思いのままに使い、一つの活動に拘泥することなく様々な活動に軽やかに移って行く若者像が浮かび上がる。

「仕事も余暇も」大切であると考え、現在の仕事に拘泥することなく転職に対しても違和感なく、自分の主張を仕事にも余暇にも反映させている。つまり生活をエンジョイすることに興味があるので、自分なりの生活のやり方（ライフスタイル）というものを大切に考え、余暇活動にも主体的に選択的に関わる。自分のライフスタイルに適ったスポーツ活動には主体的に積極的に参加するとしても、そうでなければ見向きもしないと言えるだろう。

b. 子を扶養する親

自由時間をどの様に使うかその使用目的の質問に対して、30代、40代は「家族のきずなを深めること」、「心身の疲労回復」を上げている¹⁰⁾。父親として家族の中で重要な役割を担っているが、仕事にしても中間管理職に就いており第一線でもっとも活躍できる責任ある立場にあるので、仕事に追いやられ時間的にもあまり余裕はない。ただ企業戦士でありながらも子供の養育についても家庭に対しても責任感が強く、そのことがまた自分の体の健康についての意識を高めていることが窺える。

必然的に余暇は、知識教養を深めることもさることながら、家族とともに楽しむか、あるいは休養、気晴らしに当てられるか、もしくは時間をやりくりしながら体の健康のためにより積極的に体力増強の目的でスポーツなどが行われることになる。三つの生活領域はまさにそれぞれ固有の活動で占められ、そこでは特有の合目的な機能的な活動が行われる。

c. 主婦

ここで言う主婦とは、専業主婦もしくはせいぜいパートタイムで仕事を持つ程度で、子供たちは学校に通うようになっており子育てに手間暇が掛からなくなっている家庭婦人を指している。

家事に要する時間は近年特に減少傾向にあり、主婦の余暇時間は確実に増大してきている。核家族化の進展により三世同居の家庭は少なくなっているため、朝、夫や子供を送り出し、家事を済ますと、主婦には夕方まで十分な余暇時間がある。女性の社会的進出が進み家庭の外に出て行くことにむしろ肯定的な評価が与えられる現在では、余暇時間をもっともよく利用できる立場にあると言ってもよい。もしパートタイマーとして働いていれば、自分の自由になるお金も手元にあり、気遣いなく余暇時間を思いのままに使えるだろう。昼間の主婦が余暇産業のターゲットになるのもうなづける。

3 高齢夫婦（65歳以上）

ここで言う高齢夫婦とは基本的には夫が退職している夫婦を指しており、年齢的には若干の上下はあるだろうが、男性は65歳以上と考えてよい。'91年の国勢図会によると、2020年には65歳以上の人口は4人に一人という高齢化社会が到来することが予測されており、平均寿命は80歳を超えるということを考えると、この15年から20年という退職後の余暇は今後重要な社会的な問題になってくることは想像に難くない。

この年齢に達すると基本的には退職しており毎日が日曜日である。つまり一日の生活時間は、生計を立てるという意味での仕事からは解放されて

おり、家庭生活と余暇生活という二つの領域から構成される。その家庭生活も、子供は独立し家を出ており、実際に三世同居という家庭生活は減少傾向にあり、夫婦世帯もしくは独居世帯という家族構成が増大することを考えると¹¹⁾、気ままな生活であり時間的に余暇生活と重なり合う部分が少なくない。

高齢者を「役割」という観点から見ると、それまで就業していた頃と違い、様々な役割からの引退に遭遇している。家族役割（父親、母親という役割）からも職業役割からも明らかに疎外されている。それは他人からの役割期待の弱体化を意味し、社会関係の減少を意味する。自らの意志にかかわらず、否応なく社会的な活動からの引退を余儀なくされ、社会参加は受動的で弱く、また実際他人からのそうした要請の機会も少なくなってくる。

結局高齢者の一日の大部分は余暇という自由裁量の時間・活動で占められる。仕事、家庭、余暇という三つの領域にすべて満足できると生きがい感をもっとも強く、また仕事だけでも満足できると生きがい感も強いが、余暇だけに満足では生きがい感は強くないという結果が報告されていることから¹²⁾、この時期の余暇はそれまでの余暇とは異なる機能を果たし、価値を持たなければならなくなる。つまりこの領域にもそれまでは仕事で果たしていた機能を持たせる必要がある。例えば、仕事が各人に与える喜びの一つである「何かをつくる」、「何かに役立っている、貢献している」という気分、つまり「社会的なつながりを持っている」という確信を持たせることである。むしろ事実こうしたことを人々は余暇活動に求めていると言ってもよい。もちろん国民生活白書を見ても、60代以上の人々が自由時間の使用目的を問われて、「体力増強」、「健康維持」の活動に従事すると答えていることから、スポーツにもそうした側面を期待してよいが、余暇の果たす上述したこの社会的側面も決して無視できないことをここで特に指

摘しておこうと思う。

3. 指導者に求められていること

指導者という場合、一般的にはコートの上で実際に指導する指導者を指している。つまりどのようにしたら正しい技術を身につけることができるかという観点からの指導の専門家である。しかし社会体育指導者は単にコート上の技術指導能力を身につけているだけでは現実的な対応ができなくなっていることは、前述した様に人々の生活のなかの余暇の意味がライフステージにより異なり、余暇活動としてのスポーツも様々な意味を帯びるようになることから明らかである。ここではさらに指導者に限らず、社会体育そのものを充実発展させる上で望まれることについても幾つか私見を述べてみようと思う。

ここで社会体育指導者という場合、「教育課程として行われる学校体育以外の領域で、社会の成員の自発的スポーツ活動を援助促進する指導者」¹³⁾を指している。それは非営利団体のものであれ、営利団体のものであれ、公共機関のものであれ、民間団体のものであれ、ともかく学校教育の外で行われるスポーツの指導者を指していることに注意しなければならない。

社会体育の指導者に対して、「今後どのようなことを身に付けていきたいか」という問いかけをすると、技術の向上や指導技術などコート上のことに関する以外以外の答えが返ってくる。しかしその前にここで改めて一歩立ち止まり考えてみなければならない点は、はたしてスポーツ技術にしろ、指導方法にしろ、それらは本当に指導対象を想定した適切なものとして吟味されたものであるのかどうかということである。例えば、子供たちに「何を」「どのように」指導していいかといったことに関して真剣な論議がされてきたかどうか疑問わしい。むしろ指導者の経験に頼り過ぎてあったのではないだろうか。

こうしたスポーツの構造を理解する時の一つの

示唆的な考え方は「心技体」の考え方である。「心技体」の考えは、三者のいずれもがバランスよく健全に向上することを目指しているが、観念的には「心が体と技術を支配する」という主張であると言えるだろう。にもかかわらず、これまでその「心」の形成に十分な努力を傾けてきたか疑問である。「スポーツの場に向かわせる心」、「スポーツする心」といったものを形成することに熱心であったかどうか疑わしい。指導に熱中するあまり戸塚ヨットスクール的な考え方が支配的ではなかったか反省してみる必要がある。少年時代に形作られた「スポーツを楽しむ心」が、その後の将来のスポーツに関わる生活を左右すると考えられはしないか。つまり、少年時代に培われた「スポーツを楽しみと思う心」が、成人してもスポーツの場に「体」を向けさせるのである。スポーツの中心にはこの「心」の領域があり、それを取り囲む形で「体」「技術」或いは「戦術、戦略」があると考えべきである。そしてこれはスポーツの高度化したことによって次第に指導の力点が漸次そこへ移行していくものであり、少年時代にはまず何れともあれ「面白い」と思わせるような指導が必要ではないかと主張したいのである。大人の指導者が考える面白さを子供たちに指導してしまっていないか、大人目からみた面白さに捕らわれて子供たちの指導に携わってはいはしないか、改めて考える必要があるようである。朝から一日中野球の練習に打ち込んでいながら、夕方帰宅してからまたキャッチボールに興じている子供たちは、正式な野球ではなく遊びの野球をやっている¹⁰とすると、子供たちの目に映るスポーツとは一体何かと考えてしまうのである。

高度化した競技スポーツに進むのであれ、手軽な余暇活動として行うにせよ、スポーツに取り組む気持ちを起こさせ、そして継続させるには、この「心」の育成が重要である。そしてそこから「何」を教えるか、指導内容が決定されるし、指導のやり方もそれに対応してこななければならない

はずである。

ここである一つの仮説を提示すれば、指導者が達成動機に捕らわれ過ぎるあまり、「何かに取り組めば、必ずその成果をださなければならない」と考え、また「そうしないと子供達の親が納得しない」と思い込んでいるからかもしれない。スポーツに熱中させる一番の方法は、「勝つ」（達成すること）であり、またスポーツをやることで「礼儀正しくなった」「キビキビ行動するようになった」といった目に見える生活態度の変化をスポーツによって引き起こすことであり、そうすることが子供にも両親にも誘因になると考える指導者の姿である。指導者の質にも、豊かになったと言われながら、スポーツにも同様に業績主義、効率主義、効能主義の考え方を当てはめてしまい、そこからなかなか抜け出せない姿が見え隠れする。スポーツの構造を理解した上で、「何を」「どのようにして」指導するかといった指導方法についても、実はまだまだ知識を深めていかなければならないようである。

また子供達が「スポーツ少年団」を離れては継続的にスポーツを行えるような場が欠けていることが、その後の子供達のスポーツ活動の疎外要因になっていることを見逃してはならない。年代を越えて継続的に行えるようなスポーツ組織がなかなか見つからないのが現状である。その解決策の一つが既存のスポーツ施設の「クラブ組織」の運営である。施設がスポーツ活動の拠点となり、そこへ行くといつでもスポーツ活動に参加できるといった制度が作り上げられていれば、それまで積み上げてきたスポーツ経験に障害が起きることはない。もっと高度なスポーツを経験したい者にとっては、クラブに所属している上級者の技術を目の当たりに出来、スポーツ技術を獲得するときに非常に有効な「模倣」（モデリング）がいつでも行えるクラブであり、そしてもちろん暇なときに楽しみたい者、健康のために楽しみたい者を包括出来る「クラブ組織」が理想である。スポーツを行

したスポーツそのもの（種目）を行うこともさることながら、その行うときの「やり方」も重要な側面を構成している。服装やことば使いなどを含む振舞いや物腰、あるいは時間の使い方、更衣に必要なロッカールーム等々、スポーツ活動を取り囲む物理的・社会的環境などもスポーツを行うときの大切な枠組みとなっている。人々の従事するスポーツ種目にも、スポーツ活動そのものの楽しさだけでなく、社会的意味を満足させることが人々を魅き付けることを銘記しなければなるまい。このことはまた特に若者のスポーツ行動一般にも当てはまることである。営利を目的としたスポーツ施設などではターゲットとなる対象者のライフスタイルを考慮した上でスポーツ種目、各種の施設・設備を選択的に整備充実していくべきであろう。

そして来るべき高齢化社会を視点にいれると、スポーツの持つ面白さや体の健康に対する機能的な側面ばかりでなく、充実した生活の一つとしてスポーツ活動が営まれることを念頭に置き、ただ単に楽しむ場ではなく、社会関係が結ばれる場としてスポーツを捉え直していくことも必要である。

既に述べたように、高齢者を「役割」という観点から見ると、それまで就業していた頃と違い、役割喪失に遭遇している。好むと好まざるとにかかわらず様々な社会的な活動から身を引き、それに伴い社会関係は受動的で弱いものとなり、私生活に閉じこもりがちである。そこから高齢者の余暇活動の中には、それまで仕事の領域が果たしていた社会関係の取り結びの機能を積極的に企画していくべきだと主張できるのである。社会体育指導者は、社会体育を「よりよい生」の視点から捉え、この高齢者のスポーツ活動はたんにコートの上の活動だけに限定されない広がりを持ち社会的機能を果たすことを踏まえ、高齢者のスポーツ活動を援助推進していくべきである。

そして高齢者の健康を考えると、高齢者の老人生理学もしくは運動生理学、あるいは老人心理学もしくはスポーツ心理学の研究がますます行わ

れるとともに、そこから得られた知見を指導の現場に生かしていく努力も必要となることを付言しておこう。

こうしたことから、社会体育指導者には、直接的なスポーツの技術指導や運動処方だけでなく、スポーツ活動が営まれるスポーツ空間の整備・充実やスポーツのもつ特性を考慮した種目の選択、組織の運営など、対象者の生活パターンを理解した上での多様な対応が求められているのである。

4. 社会体育指導者の育成にあたって

余暇市場の推移をみてみると、スポーツ施設・スクールは62年から63年にかけて前年比13.8%の伸びを示し、2兆3290億円の売上を記録している。その前年が11.5%、2兆470億円という結果を考え合わせると、スポーツ施設の利用、あるいはスポーツスクールの利用は今後まだまだ伸びることが予想される¹⁵⁾。また週の休みがもう1日増えるとしたら「ぜひやりたいもの」「関心はあるが出来るかどうかわからない」活動にアウトドアスポーツ、リゾートでのスポーツといった活動が上げられている。これは自然指向と旅行、スポーツを組み合わせた活動が望まれていることを示している¹⁶⁾が、一日はスポーツ、一日は休養（ごろ寝）といった休日の使い方が予想される。

こうした統計からも、学校を離れた場で行われるスポーツ活動を援助推進する社会体育指導者の果たす役割は重要であり、その育成は緊急の課題である。

さてカリキュラム編成に当たっては、現実的な要請に応え得る資質・能力を身につけるよう配慮されることは言うまでもない。つまり社会体育指導者は指導対象者の持つ要請に対応出来ることが基本的な前提であり、スポーツが行われる時の人々の動機を理解し、その上にたって実際の指導やスポーツ活動を成り立たせる環境整備を行っていくことが課せられた任務になるので、そうした資質・能力を身につけられるように配慮されたカリキュ

して第1子の年齢により4つのライフステージを、さらにすべての子どもが就職または結婚した親として、6つのステージを設定しているが、その他にもその区分の仕方に若干の相違はあるとしても、就業、結婚、出産、子供の独立、退職、といったことが、その節目と捉えられている。

- 3) 退社から入社までの時間のうち通勤所要時間を除いた残りの時間、即ち在宅時間と考えてよい。越河六郎著『余暇の設計』「労働の科学」43巻7号 p11、1988年。
- 4) ibid、p13。
- 5) 野沢浩著『非労働時間の枠組みと改正労基法』「労働の科学」43巻7号 p6、1988年。
- 6) これにより週40時間が実現し、年間では1960時間に短縮される。朝日新聞1991年12月27日夕刊
- 7) 昭和60年をモデルにしたときのライフコースから、女性の結婚年齢が25.5歳、男性の結婚年齢が28.2歳と計算されている。(出典 井江朝章他編著「現代教養としての社会学」福村出版 p150、1989年)
- 8) 経済企画庁編「国民生活白書平成元年版」p137 平成元年 大蔵省印刷局
- 9) ibid、p126。
- 10) ibid、p137。
- 11) 「日本国勢図会1991」国勢社 p67 1991
- 12) 坂上 肇著「生きがい」三笠書房 p232 1987
- 13) 金崎良三著『社会体育指導士の条件・役割の検討』「体育社会学研究5」体育社会学研究会編 道和書院 p87、昭和51年。
- 14) 内海和雄著 がんばれスポーツ少年 新日本出版社 p8 1987年。
- 15) 余暇開発センター「レジャー白書 '90」
- 16) 余暇開発センター「レジャー白書 '89」
- 17) 新井貞光著 「これからのスポーツと体育」道和書院 昭和61年。
- 18) ピエール・ブルデューは、スポーツを肉体に

対する見解の違いから、体がぶつかりあうスポーツを好む階級、軽体操を好む階級、あるいはお洒落なスポーツを好む階級など、スポーツがシンボルの意味を帯び、それに応じてスポーツを実践する人に社会的な特性に違いが出ることを指摘している。

主要参考文献

- I. ロソー著 嵯峨座晴天訳「高齢者の社会学」早大出版部 1983年
 - 経済企画庁「国民生活白書平成3年版」大蔵省印刷局 平成3年
 - 小林司編「現代の生きがい」現代のエスプリ281 至誠堂 1990年
 - NHK世論調査部編「日本人の生活時間」日本放送出版会 昭和61年
 - 通商産業省産業政策司編「スポーツビジョン21」通商産業調査会 平成2年
 - 〃 「ひとり社会の基本構想」通商産業調査会 平成3年
 - P. ブルデュー著 石井洋二郎訳「ディスタンクシオン」新評論 1989年
 - 〃 田原春和訳「社会学の社会学」藤原書店 1991年
 - 瀬沼克彰著「どうなる日本人の余暇ライフ」ぎょうせい 昭和63年
- 1991年12月31日受付